

# Julius Caesar における二面性

金城盛紀

## 1

*Julius Caesar* は、従来、英語国では high school favorite とされ、わが国でも Shakespeare 入門への恰好なテキストとして広く講読されてきた。難解不明な語句も殆んどなく、文体は平明、構造は単純、そして冒瀆的な言辞も卑猥な表現も見当たらない。「巨像のごとく世界をまたぐ」英雄とその崩壊が示され、人口に膾炙する名演説があり、さらに、叛乱軍の敗退によって再逆転の終結をみるローマ史劇として興味は尽きないものがある。

しかしながら、*Julius Caesar* はかならずしも単純平易な作品ではない。今日では複雑難解であり、一定の解釈や評価は下しにくいとする声も大きい。例えば、Ernest Schanzerが、*The Problem Plays of Shakespeare* 第1章を“*Julius Caesar* is one of Shakespeare's most controversial plays,”<sup>1</sup> と書き始めれば、Mildred E. Hartsock はその *Julius Caesar* 論を“*The Complexity of Julius Caesar*”と題する。<sup>2</sup> *The Riverside Shakespeare* 所収の *Julius Caesar* が最も新しい権威ある注釈版であろうが、その序文において、Frank Kermode が、“... *Julius Caesar*, so lucid at first reading, has recently, and more than once, been called one of the most difficult plays to assess and interpret.”<sup>3</sup> と述べていることも、この作品の解釈評価さだまらない問題を指摘しているといえよう。

*Julius Caesar* はその基本的な点についてさえ批評家の合意は成立していない。まず、ドラマの主人公は誰であるか。今日では、作品の題名となっている Caesar をプロタゴニストであるとする主張は鳴りをひそめたとしても、<sup>4</sup> MacCallum や Dorsch のように、Brutus を“dramatic hero”とすれば、<sup>5</sup> 他方、Caesar と Brutus の両人が不可分に悲劇の主人公になっているとする論も根強いものがある。<sup>6</sup>

ドラマの核心となる Caesar 暗殺は善なる行為か、悪の所業か。ルネサンスの多くの思想家と共に、Caesar を専制独裁者ときめつけ、<sup>7</sup> また Dover Wilson に従って作品の主題を“*Liberty versus Tyranny*”として、<sup>8</sup> Caesar の鮮血で赤く染まった刃は、古い逍遥訳の題名のように「自由の太刀」<sup>9</sup> とするか。あるいは、中世の伝統まで逆のぼり、ダンテにならって、Brutus を普遍的秩序を破壊した忘恩背信の徒として、ユダと共に奈落の底へ落すか。<sup>10</sup> Brutus の刃は、暴君を打倒した「自由の太刀」か、“model ruler”<sup>11</sup> に対して振われた叛逆の凶刃か。あるいは、時代の流れや観客読者の好尚に即応する「玉虫色」の剣とすべきなのか。

## 2

*Julius Caesar* における二面性については、すでに多くの論者が何らかの指摘を行っている。

“The contrast between the weakness of Caesar’s bodily presence in the first half of the play, and the might of his presence in the latter half of the play, is emphasized and perhaps over-emphasized by Shakespeare.” とは100年以上も前になされた Dowden のコメントである。<sup>12</sup> Brutus の悲劇を論じる L. C. Knights も、Caesar や Brutus の「公的世界」と「私的世界」の分離を指摘する。<sup>13</sup> R. A. Foakes は、「叛乱の発生と完結」に作品の構造上の統一を見出すのであるが、主要な登場人物を「公人像」と「私人の姿」に対比させ、さらに「行為」と「理想」の乖離を論ずる。<sup>14</sup> Adrien Bonjour は、*Julius Caesar* において、Shakespeare は、“dualistic conception”をもって、“divided sympathies”のドラマをつくりあげたと興味深い指摘をしている。しかし、彼はつまるところ、政治（公）と個人（私）のかかわりを「二重概念」と称し、Caesar と Brutus の二人を不離一体の関係にあるとして、相対立する双方に対して寄せられる読者の共感を「二分された共感」と定義しているに過ぎない。<sup>15</sup> わが国でも、大山敏子氏が、「これら互いに相反し、相矛盾する二つの力の相剋を悲劇にしてゆくのが、この劇の言葉であり、表現であり、修辞の技巧である。」と述べている。<sup>16</sup> 蛭原啓氏の日本シェイクスピア協会設立15周年を記念した論集所収の論文「シーザーとブルータス」でも、『シーザーの肉体』と『シーザーの精神』の二重性<sup>デュアリズム</sup>について触れている。<sup>17</sup>

以上いくつか例にあげた内外の論考においてなされる二面性、二重性、対立概念の指摘は、それぞれ適切であり妥当であると思われる。しかし、対立概念そのものに作品の主題を見出すような印象を与える Bonjour の研究でさえも、実際には Caesar—Brutus 論になっているように、二面性や対立概念は他のテーマを表現する手段や要素として捉えられているに過ぎない。

### 3

*Julius Caesar* は作品そのものが二元論的世界をつくりあげているといえるのではないだろうか。作品の世界が真二つに分裂し、分裂したそれぞれの世界が、また、何らかの形で二分される。このように細胞分裂の如く幾重にも二分される単位の中心的人物が、分裂した他の単位の指導的人物と対照される。さらに、個々の登場人物にしても、それぞれが二分化された人物像として描写されている。重要な場面や事件の殆んどが二つのそれぞれ相反する側面を強調する。文体においても対句法や対照法の技巧が駆使されていて、構造・人物・事件の二面性を反映し reinforce する。Shakespeare は、このローマ史の一断面をとらえた作品において、ピタゴラス以来西洋人の抜き難い思考認識の様式となっている二元論的世界観に基づいて、dualistic nature of life ともいうべき主題を展開しているといえはしないだろうか。

*Julius Caesar* の世界は大きく二つに分断されている世界である。Caesar の体制側と共和制の護持存続をはかる反体制側。政治的秩序と安定、ローマの栄光をもたらした Caesar の偉大な力に対するに、少なくとも表面的には Brutus の信奉する共和主義の理想。一方が Caesar の凱旋を祝し民衆の支持を得て執政支配を強化しようとすれば、他方、これに反撥し、独裁専制を未然に防止せんとする勢力がある。Caesar に権力が集中することに対する危惧の念が、国を思い共和制を守り抜こうとする純粋な信念に基づくか否かは今は問わない。ただ、正面か

ら対立し衝突する二つの政治エネルギーの存在が作品の大きな枠組となっている事実注目しておきたい。

プロットも Caesar 暗殺を旋回軸として二分される。反体制側から見れば、前半は Caesar 打倒、共和制擁護の願望およびその達成への盛り上がりであり、後半は、願望達成に踵を接するように続く幻滅の現実である。前半では Cassius—Brutus が能動的であり、Caesar が受身となるが、後半においては、Caesar の精神が働きかけ、叛逆軍は鎮圧を受ける側となる再逆転劇が演じられる。

#### 4

Caesar 打倒を旗標に立上る勢力は、対照的な二人の指導者の連合によって成立する。エビキュリアンの Cassius が、Caesar に対して抱く反撥が私的感情——嫉妬——に基づくものであれば、ストイックの Brutus をして友情という個人感情を否定せしめて決起させるのは憂国の情であり、ローマ市民の自由を擁護せんとする理想主義である。

Caesar の独裁を許さないという共通の目標のために結束しながらも、基本的に相対立するこの二人の指導者は、また、それぞれが対立した要素の結合体でもある。

Cassius を苛立たせ、Caesar 打倒へと駆り立てるのは嫉妬心であると述べたが、彼の言い分に耳を傾けてみよう。

I was born free as Caesar ; so were you ;  
We both have fed as well, and we can both  
Endure the winter's cold as well as he :  
For once, upon a raw and gusty day,  
The troubled Tiber chafing with her shores,  
Caesar said to me, "Dar' st thou, Cassius, now  
Leap in with me into this angry flood,  
And swim to yonder point ?" ...  
.....  
But ere we could arrive the point props'd,  
Caesar cried, "Help me, Cassius, or I sink."  
I, as Aeneas, our great ancestor,  
Did from the flames of Troy upon his shoulder  
The old Anchises bear, so from the waves of Tiber  
Did I the tired Caesar. And this man  
Is now become a god, and Cassius is  
A wretched creature, and must bend his body  
If Caesar carelessly but nod on him.

(I. ii. 96-117) <sup>18</sup>

ここには Caesar に対する競争意識が露骨に表われているだけではない。我こそが「生き神

様」になる筈の人物でありながら、かつてのライバルの前で「小腰をかがめ」ざるを得ない“wretched creature”にされたやるかたなき私怨が感じられる。Cassius のいかにも残念そうな言葉は続く。

He had a fever when he was in Spain,  
And when the fit was on him, I did mark  
How he did shake; 'tis true, this god did shake;  
.....  
Alas, it cried, "Give me some drink, Titinius,"  
As a sick girl. Ye gods, it doth amaze me  
A man of such a feeble temper should  
So get the start of the majestic world,  
And bear the palm alone.

(118-129)

熱で震え弱音を吐くような人間に「勝利の栄冠を独り占め」にされることか？ Cassius には耐えられないのである。傷ついた自尊心を修復するには「勝利の栄冠」を奪い取るほかない。

しかしながら、Cassius は私情に流される人物ではあるけれども、機略縦横な政治家であり、智謀たけたる軍略家でもある。上に引いた彼のせりふも無益にぶちまけた腹癒せの繰り言に終るのではない。Brutus の利用価値を充分に承知の上で陰謀に引き込もうと企み、そしてその企みは、揺れ動く Brutus のところに結着をつけさせるのに見事に成功するのである。

O, he sits high in all the people's hearts:  
And that which would appear offence in us  
His countenance, like richest alchemy,  
Will change to virtue and to worthiness.

(I. iii. 157-160)

と述べる Casca はこの謀略家の真意を代弁している。いやしい私的感情に動かされて、栄光に輝く大指導者に弓を引き、あえて天下を混乱に陥れることをも辞さない人間でありながら、状況を適確に判断し、人の心理の機微に触れて自らが望む方向へ動かす。かかる才智にたけているのが Cassius である。自己中心的な情念とリーダーに求められる能力という相反する価値をあわせもった人物である。彼は私的感情と公的能力の乖離がいちじるしい人物である。

しばしば作品の主人公とされを Brutus はどうであろうか。

He only, in a general honest thought  
And common good to all, made one of them.  
His life was gentle, and the elements  
So mix'd in him, that Nature might stand up  
And say to all the world, "This was a man!"

(V. v. 71-75)

とは勝利をおさめた Antony が Brutus に呈する賛辞である。しかし、これは倒した敵将に与

えた追悼の言葉である。Shakespeare がつくりあげた Brutus は、たしかに国家万民のために願う崇高な精神をもっている人物であることは事実であるが、その資質が美事に融合調和した人間であるとはいいい難い。彼を特徴づけるのもまた二面性なのである。Gordon Ross Smith のように、Brutus を、“ugly, neurotic” ときめつけて自己中心的勝手気ままな点を14も列挙する批評家もあるが、<sup>19</sup> Brutus の美点を14以上あげることにもまた容易である。矛盾対立を内包する存在であり、自らも語るように、「自分自身とたたかっている」人間 (I. ii. 45) が Brutus である。

Brutus の信奉する共和主義・ローマの自由そのものについても否定的な見解がある。<sup>20</sup> しかし、個人的な羨望嫉妬の感情とは全く独立して Brutus の政治信念は存在する。私怨によって動かされる Cassius とは対照的に、Brutus は、友人として Caesar に刃など向けたくはないのである。

It must be by his death: and for my part  
I know no personal cause to spurn at him,  
But for the general. He would be crown'd:  
How that might change his nature, there's the question.  
It is the bright day that brings forth the adder,  
And that craves wary walking. Crown him? — that; —  
And then, I grant, we put a sting in him,  
That at his will he may do danger with.  
Th' abuse of greatness is when it disjoins  
Remorse from power; and, to speak truth of Caesar,  
I have not known when his affections sway'd  
More than his reason. But 'tis a common proof,  
That lowliness is young ambition's ladder,  
Whereto the climber-upward turns his face;  
But when he once attains the upmost round,  
He then unto the ladder turns his back,  
Looks in the clouds, scorning the base degrees  
By which he did ascend. So Caesar may;  
Then lest he may, prevent. And since the quarrel  
Will bear no colour for the thing he is,  
Fashion it thus: that what he is, augmented,  
Would run to these and these extremities;  
And therefore think him as a serpent's egg,  
Which, hatch'd, would, as his kind, grow mischievous,  
And kill him in the shell.

(II. i. 10-34)

この苦渋に満ちた独白には公的理念と私的感情の相対立がみられる。もっとも、この二律背反はやや単純に、一方的に片づけられてはいるけれども。しかし、二面性を意識してこの独白を検討すれば、Brutusにおける政治的意図の純粹性と状況判断の誤りという新たな、しかも重要な二面性も浮び上がってくる。親友の未来の行動を仮定の上で断定して、予防殺人ともいうべき行為で機先を制するという結論は、「高貴さによって知性をおし殺した」<sup>21</sup> 間違いといい得る種類のものであろう。クーデター成功の後も、Brutusの理想主義、純粹さ、高貴さは、彼が繰り返し犯す政治的軍事的に重大な過誤の原因となる。Cassiusが、Caesarの道連れにすべきであると主張する“shrewd contriver”であるAntonyの命をあえて守り、またその上に、強い反対を抑えてAntonyに追悼演説を許可するのもこの種の誤りである。

妥協を許さず理想主義に徹し、純粹公平であらんとするBrutusは、公の場においては観念的抽象的となり、いわば足が地から浮いて、現実の問題に対して有効に対処することはできなくなる。正廉潔白の士としての自負もときには鼻もちならない独善になる。しかし、Brutusはプライベートな人間関係においては、こころやさしき情愛に満ちた人物として生彩を放つ。妻Portiaに対して然り。Lucius少年に対する地位身分を超越した気遣いにBrutusの人間的あたたかさを感じない観客はいないであろう。公人としての行動のnaivetéと私人としての人間的魅力は鮮やかな程に対照的である。

Caesar陣営におけるAntonyとOctaviusの対立関係は後で触れることにして、Antonyの人間像を一瞥しておきたい。彼もCassiusやBrutusと同様に二面性をもった人間である。抜け目のない冷徹な現実的軍人政治家であると同時に、涙もろい女性的やさしきこころの持ち主でもあるのはSchanzerが指摘している通りである。<sup>22</sup> あえなくも虐殺されたCaesarの遺体を前にして、Brutus一派に対して吐く言葉には、見事に計算した政治家の賭と偉大な英雄を失った人間の深い悲しみが交差する。

If I myself, there is no hour so fit  
As Caesar's death's hour; nor no instrument  
Of half that worth as those your swords, made rich  
With the most noble blood of all this world.  
I do beseech ye, if you bear me hard,  
Now, whilst your purpled hands do reek and smoke,  
Fulfil your pleasure. Live a thousand years,  
No place will please me so, no mean of death,  
As here by Caesar, and by you cut off,  
The choice and master spirits of this age.

(III. i. 153-163)

暗殺者たちの血にまみれた手を取り、追悼演説を行う許しをとりつけるのに成功して、一人残るや断魂の情を吐露する。

O, pardon me, thou bleeding piece of earth,  
That I am meek and gentle with these butchers,  
Thou art the ruins of the noblest man  
That ever lived in the tide of times.

(254-257)

この後に続く Antony の独白には、緻密な計算をし、見事な演技を見せた政治家でありながら、快楽主義者として破壊混乱に心酔する無責任な姿も髣髴させるものがある。

And Caesar's spirit, ranging for revenge,  
With Ate by his side come hot from hell,  
Shall in these confines with a monarch's voice  
Cry havoc and let slip the dogs of war,  
That this foul deed shall smell above the earth  
With carrion men, groaning for burial.

(270-275)

Brutus の Antony 評, "... he is given To sports, to wildness, and much company." (II. i. 188-198) は、皮肉にも正しいのである。

この作品の題名となっている Julius Caesar の二面性についてはすでに多くの評論がなされている。<sup>23</sup> Antony に同調して、Caesar を秩序と安定の象徴とみるか。あるいは、Brutus が信じたように専制独裁の悪とするか。この問題については Shakespeare 自身決断しかねたとする解釈もある。<sup>24</sup> しかしながら、ローマ共和国の他の主役たちと同様に、Caesar の二面性についても長い歴史を経て確立した伝統があるという Bullough の指摘を無視してはならない。<sup>25</sup> 作者はもとよりエリザベス朝の人々が天地宇宙に不可欠のものとみた秩序と、彼らが恐れ嫌悪した暴君の独裁専政という相反し矛盾する二面が Caesar を特徴づけるのである。Caesar が表わすこの二面性は、秩序願望と専制拒否（民主主義の形態をとる専制もある）という人間のあり方における基本的に矛盾する二律背反の問題にかかわるものであろう。

作品における Julius Caesar は存在そのものが二面性を強調するものである。天下制覇を成就し栄光に輝く偉大な公人 Caesar と、身体的には脆弱な私人 Julius —— この二面性は例示の要もない程顕著である。

But I am constant as the northern star, (III. i. 60)  
Wilt thou lift up Olympus? (74)

と豪語できる権力の座にありながら、陰謀者の一撃にもろくもその肉体は崩れる。一個の人間としていかに弱体であるか、Cassius の嫉妬心で潤色された虚弱な Caesar の話もすでに聞いた。"I rather tell thee what is to be fear'd Than what I fear; for always I am Caesar." (I. ii. 208-209) という自信に満ちた英雄の言葉に続くのはその肉体的欠陥を示す、まことに revealing なせりふである。"Come on my right hand, for this ear is deaf." (210) Caesar の左耳をあえて難聴にしたのは Shakespeare であるとすれば、<sup>26</sup> その創作意図は明白である。

*Julius Caesar* における重要な場面や出来事・事件についても二面性を指摘することは容易である。

開幕冒頭の登場人物がまず二分される。甲高い声で高圧的にどなりつける護民官二人と、祝賀気分の職人たちのグループ。おそらく舞台への出退場にもそれぞれ異なる出入口を通るのであろう。Traversi は、市民たちの浮かれ気分に居丈高な護民官の感情が混じ合うと述べるが、<sup>27</sup> たとえ混じり合ったとしても、それは水と油の混合のようなもので、渾然一体となるわけではない。

Caesar 亡きあと、真二つに割れたローマは二大勢力が拮抗する内乱へと突入する。しかも、双方の陣営内において、それぞれ二肢分割による対立関係がみられる。

共和制派に Brutus と Cassius の対立があれば、Caesar のあとを継がんとする陣営は、Antony と Octavius の両軍に分れる。前者の二人が、収賄汚職という公の問題で私的な感情丸出しの口論をし、さらに、フィリパイへ軍を進めるか否かで意見を衝突させれば、Antony と Cassius も右翼を率いるか左翼にすべきかで意見が合わない。Plutarch では、この左右選択の争いは、Brutus と Cassius の間に起る衝突である。<sup>28</sup> Shakespeare がこれを Antony—Octavius に移したのは、Octavius の性格づくりのためだけでなく、両陣営における二肢分割による対立を強調するためでもあると考えられる。

5幕1場の“flyting”の場も Plutarch には見当たらない。しかし、両軍の対峙は、二分されたローマ軍を“scenic”に形象化する重要な場面である。しかも、両陣営の首脳たちが口ぎたなく罵倒し合うのは言葉と行動の乖離についてである。

Brutus と Antony の有名な演説については多言を要さない。理想主義者の Brutus が正義と自由を理路整然と群衆の理性に訴えて説けば、他方、Antony は大衆の感情に訴えてそのところを捉え、形勢を見事に180度逆転させる。Brutus の演説が淡々とした散文であるのに対し、Antony の説得は熱っぽい韻文でなされる。Shakespeare はここでも二分法をあざやかに提示しているといわざるを得ない。

Shakespeare の imagery 研究で先駆的な業績を残した Spurgeon も、imagery を巧妙適確に劇作品のコンテクストにおいて分析した Clemen も、*Julius Caesar* における imagery については多く語らない。<sup>29</sup> しかし、imagery が不毛であるといわれるこの作品の imagery にあえて注目した批評家の指摘するのが対照を表わす表象である。また、主な imagery が Caesar 暗殺という中心的事件の解釈を真二つに分ける“opposed meanings”を表すものであるというのも興味深い。Bonjour は、S. L. Bethell に従って“image”という語を広く解釈し、「いくつかの場面に統一をもたらすような繰り返し用いられる語」も“image”の概念に含める。そのような“image”として彼が指摘するのが fall—stand 等の対立するいくつかの“image”である。<sup>30</sup>



Charney も、嵐、血、火を主な “image themes” としてあげる。それぞれの image が、Caesar の死と同様に、全く相反する antithetical な解釈を可能とするものなのである。<sup>31</sup>

*Julius Caesar* には、二つの表現形態あるいは観念を並置ないしは対照させた修辞上の技巧をこらした措辞が多い。いくつか例を挙げてみよう。

Let's kill him boldly, but not wrathfully; (II. i. 172)

が1行で前半と後半が antithetical であれば、続く次の2行も見事な対照法になっている。

Let's carve him as a dish fit for the gods,

Not hew him as a carcass fit for hounds. (173-174)

更に、

Our arms in strength of malice, and our hearts

Of brothers' temper, do receive you in.... (III. i. 174-175)

においても、Dorschも指摘している通り、“Our arms in strength of malice” と “our hearts Of brothers' temper” は形態上並置法をとり、意味の上では対照法となっている。<sup>32</sup>

Had you rather Caesar were living, and

die all slaves, than that Caesar were dead, to

live all free men? (III. ii. 23-25)

Brutus のこの演説の一節でも、“Caesar were living, and die all slaves” と “Caesar were dead, to live all free men” が対照法となり、“living—die; dead—live” もまた対照法を形成するという複雑な対立構造になっている。このような文体上の技巧は、それが対句法であれ対照法であれ、二要素の並存や対立相剋というこれまで考察してきたテーマを反映し強調するように思われるのである。

## 7

Marion Bodwell Smith は *Dualities in Shakespeare* において次のように述べている。

Contradictions and paradoxes are characteristic of the thought and culture of the Renaissance, but it was given to Shakespeare more than to most writers of his time to use his insight into the duality of things as an effective instrument of his art. When Shakespeare holds the mirror up to Nature it is more often than not a double rather than a single image which is reflected there, though its doubleness is more often than not indicative of an underlying unity.... Renaissance eclecticism is not an uncritical assembling of contradictions but an attempt to reconcile them, and at its height, if not in its decline, it accepts dualities consciously and gladly as the necessary ingredients of completeness, directing its attention outward towards the infinite and inward towards the

individual in a confident search for the elements of transcendent good in the diverse realities of human experience.<sup>33</sup>

Shakespeare は人生や世界のものと二面性、多面性に深い関心を抱いた作家であるが、Smith が述べるように、ルネサンスの人間にふさわしく、彼は対立し拮抗する要素を最終的には統一し調和するものであるとして捉える。ギリシャ・ローマ以来のパラドクシカルな命題、*Concordia discors* は Shakespeare の命題でもあった。Smith も *Twelfth Night* や *Antony and Cleopatra* 等この枠組に入るいくつかの作品の “dualities” をとりあげて論じている。

しかしながら、*Julius Caesar* においては、諸々の人物、事件、場面、観念が収斂統一されることなく、並置され対照され対立されたままになっている。異なる要素の存在はしばしば二分法で強調されながら、その融合調和はついに達成されないのである。ここにこの作品の特異性があり、また、従来の諸説紛々として基本的な点においてさえ合意をみることが不可能であった理由があるように思われる。チェッカー盤のように二色が交互する市松模様を前にして、その模様の色が白か黒かと一元的に論じあってきたような感がする。

このローマ劇は、題名においてすでに Julius (私) Caesar (公) となって二面性を示唆している。Caesar を倒した陰謀者の軍隊に勝利をおさめた Antony が、敵将 Brutus に対して弔辞を述べれば、作品を締めくくるせりふは、共に戦いながらも Antony と対立する Octavius によって語られる。“So call the field to rest, and let's away, To part the glories of this happy day.” (V. v. 80-81, イタリアン筆者) 叛乱軍を制圧し勝利を博しても、それは相反し対立する要素の収束を約束するものではなく、また二面性の終息を意味するものでもない。「このめでたい日の榮譽を分ける」ことが、新たなそして決定的な分裂対立を示唆するのである。作品 *Julius Caesar* は完結しても、世界の二面性は変わらない。あるいは、世界を二面性の存在であるとみる二元論的思考認識は存続するというべきかもしれない。

#### 註

1. Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* (1963, rpt. New York: Schocken Books, 1965), p. 10.
2. Mildred E. Hartsock, “The Complexity of *Julius Caesar*,” *PMLA*, 81 (1966), 56-62.
3. Frank Kermode, in *The Riverside Shakespeare*, eds. G. Blakemore Evans et al. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974), p. 1100.
4. もっとも, “the real as well as nominal protagonist” として祭りあげた Glen Byam Shaw の演出を賛美した劇評もある。Roy Walker, “Unto Caesar: A Review of Recent Productions,” *Shakespeare Survey*, 11 (1958), 132.
5. Mungo William MacCallum, *Shakespeare's Roman Plays and Their Background* (1910, rpt. London: Macmillan, 1967), p. p. 212-214. T. S. Dorsch ed. *The Arden Julius Caesar* (London: Methuen, 1966), p. xxvii.
6. Mark Van Doren, *Shakespeare* (1939, rpt. Garden City, N. Y.: Doubleday, p. 122; Adrienne Bonjour, *The Structure of “Julius Caesar”* (Liverpool: Liverpool University Press, 1958), p. 3.
7. Geoffrey Bullough ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, v (London: Routledge and Kegan Paul, 1966), 21.

8. John Dover Wilson ed. *Julius Caesar* (1949, rpt. Cambridge: Cambridge University Press, 1974), pp. xxi-xxii.
9. 正確には『該撒奇談 (自由太刀餘波鋭鋒)』明治16年。坪内逍遙訳『ジュリアス シーザー』(早稲田大学出版部, 昭和2年), p. 3.
10. Bullough, 20.
11. Virgil K. Whitaker, *Shakespeare's Use of Learning: An Inquiry into the Growth of his Mind and Art* (San Marino, Calif.: The Huntington Library, 1953), p. 231.
12. Edward Dowden, *Shakespeare: A Critical Study of his Mind and Art* (1875, rpt. London: Routledge and Kegan Paul, 1962), p. 287.
13. L. C. Knights, "Personality and Politics in *Julius Caesar*," (1965) in *Shakespeare: Julius Caesar* (A Casebook), ed. Peter Ure (London: Macmillan, 1969), pp. 122-124.
14. R. A. Foakes, "Language and Action in *Julius Caesar*," (1954) in *Twentieth Century Interpretations of Julius Caesar*, ed. Leonard F. Dean (Englewood Cliffs, N. J.; Prentice-Hall, 1968), pp. 57-59.
15. Adrien Bonjour, *The Structure of Julius Caesar* (Liverpool: Liverpool University Press, 1958), pp. 1-24.
16. 大山敏子訳『ジュリアス・シーザー』(旺文社文庫, 昭和49年). p. 199.
17. 蛭原啓「シーザーとブルータス——性格と演技をめぐって——」, 日本シェクスピア協会編『シェイクスピアの演劇的風土』(研究社, 1977). p. 322.
18. William Shakespeare, *Julius Caesar*, ed. T. S. Dorsch (London: Methuen, 1966). 以下 *Julius Caesar* からの引用はすべてこの Arden 版による。
19. Gordon Ross Smith, "Brutus, Virtue, and Will," *SQ*, x (1959), 367-379.
20. James Emerson Phillips, Jr., *The State in Shakespeare's Greek and Roman Plays* (1940, rpt. New York: Octagon, 1972), pp. 174-188.
21. Van Doren, p. 159. Cf. "The fine man is a coarse thinker." p. 161.
22. Schanzer, p. 44.
23. たとえば Dowden, p. 287; MacCallum, p. 218; Knights, pp. 124-126 等。
24. Julian Markels, *The Pillar of the World: Antony and Cleopatra in Shakespeare's Development* (Columbus: Ohio State University Press, 1968), pp. 78-79.
25. Bullough, 17-18.
26. William Shakespeare, *Julius Caesar*, ed. Horace Howard Furness, Jr. (Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1913, a New Variorum edition), p. 47.
27. Derek Traversi, *Shakespeare: The Roman Plays* (London: Hollis and Carter, 1967), p. 22.
28. Bullough, 50-51, 120.
29. Caroline F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery: And What It Tells Us* (1935, rpt. Boston: Beacon Press, 1958), pp. 346-347; W. H. Clemen, *The Development of Shakespeare's Imagery* (1951, rpt. Cambridge: Harvard University Press, 1971), pp. 90, 93.
30. Bonjour, pp. 63-69.
31. Maurice Charney, *Shakespeare's Roman Plays: The Function of Imagery in the Drama* (Cambridge: Harvard University Press, 1961), p. 42.
32. Dorsch, p. 72, note.
33. Marion Bodwell Smith, *Dualities in Shakespeare* (Toronto: University of Toronto Press, 1971), pp. 3-4. なお, Shakespeare における調和・統一よりも, 対立, 矛盾相剋の概念をルネサンスの精神風土の中で捉えた労作が著わされたが, *Julius Caesar* は無視されている。Robert Grudin, *Mighty Opposites: Shakespeare and Renaissance Contrariety* (Berkeley: University of California Press, 1979)。

原稿受理 1980年1月23日

## Dualities in *Julius Caesar*

Seiki Kinjo

Though *Julius Caesar* has been regarded as simple enough to be a high school favorite or an introduction to Shakespeare, recently critics have come to pay more attention to its complexities and subtleties. They, however, disagree on such fundamental matters as who the protagonist is or the meaning of the murder of Caesar, failing to perceive the significance of divisions and dichotomies in the play.

This paper suggests that *Julius Caesar* shows a dualistic vision of life, through the presentation of divisions and contrarities in plot, characterization, events, and style. In contrast to the vision revealed in such works as *A Midsummer Night's Dream* and *Antony and Cleopatra* where apparent dualities and contrarities are ultimately reconciled and unified, divisions and dualities in *Julius Caesar* do not submit to synthesis. In *Julius Caesar* the plot divides into two at the murder of Caesar, the moment of fulfilment for the conspirators. The first half of the play shows their aspirations, the latter half their disillusionment. Both armies—those loyal to Caesar and those who uphold Republicanism—are divided into two. Each leader of the several factions is characterized by internal division. The titular hero is a conspicuously divided individual, at once a Colossus of Roman glory and order, and at the same time a physically vulnerable man. The parallelisms and antitheses which mark *Julius Caesar* reinforce the underlying concept of duality and dichotomy. Imagery, despite its sparseness, supports the idea of opposite or discordant qualities as presented by other elements of the work.